

## 主 題：結婚式の舞台裏で

## 聖書箇所：ヨハネの福音書 2章1-12節

先週1章全体を見終えて、今朝、ヨハネの福音書2章の内容に入っていきたいと思います。きょうは特に1-12節の部分を中心に考えてみたいと思います。まずはいつものようにみことばをお読みします。

ヨハネ2：1-12

「:1 それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、そこにイエスの母がいた。:2 イエスも、また弟子たちも、その婚礼に招かれた。:3 ぶどう酒がなくなったとき、母がイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。:4 すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」:5 母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」:6 さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった。:7 イエスは彼らに言われた。「水がめに水を満たしなさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。:8 イエスは彼らに言われた。「さあ、今くみなさい。そして宴会の世話役のところに行って行きなさい。」彼らは持って行った。:9 宴会の世話役はぶどう酒になったその水を味わってみた。それがどこから来たのか、知らなかったの、——しかし、水をくんだ手伝いの者たちは知っていた——彼は、花婿を呼んで、:10 言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、人々が十分飲んだころになると、悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒をよくも今まで取っておきました。」:11 イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。:12 その後、イエスは母や兄弟たちや弟子たちといっしょに、カペナウムに下って行き、長い日数ではなかったが、そこに滞在された。」

皆さんは何かの舞台裏というものに注目したことはあるでしょうか？恐るべきことに、卒業してもうはや5年がたとうとしています。かつて神学校に通っていた時、私は年に1回開かれるカンファレンスのボランティアをする機会がありました。全世界から数千人の牧師先生や宣教師が集う、そんな集まりにあって、特定の先生に付き添って、その都度必要な手助けをするということをしてもらいました。働き自体はそんなに大変なものではなくて、いろいろな先生と直接話をする機会は、とても有意義な時間でした。ただ、そのような時間の中にあつて、私自身一つ気づかされたことがありました。というのも、連絡を取り合うことができるようにと、ボランティアをしていた全員にトランシーバーが一つ与えられていたのですけれども、そこから流れてくる音声というものは一日中途絶えることがありませんでした。まさに朝から夕方まで数分後の予定を確認したり、調整するような会話がいつもそこから聞こえていました。それ以外にも、別の部署に応援を求めている連絡が聞こえてきたり、食事場所や休憩場所を指示するような声なども絶えず聞こえてきました。ふだんなら余り目を留めなかったかもしれません。でも、おもての予定が順調に流れていくその裏側には、それを支えているさまざまな人々の働きがあることをよく考えさせられました。舞台裏にこそ目を留めなければいけないすばらしい働きが、大切な光景が広がっていたのです。

きょう私たちが注目してみたいことは、そんな舞台裏です。これから見ていく2：1-12というのは、カナの婚礼の話です。もうすでによく知っている話の一つかもしれません。水をぶどう酒に変えたというイエス様の行った最初のしるしは、もう何度もいろいろな場所で耳にしてきた話だからこそ、ふだんもう何も考えないかもしれません。でも、この結婚式の舞台裏で起こっていた出来事は、私たちがいつも目を留めなければいけないすばらしい真理を教えてください。それがいったい何なのかを、場面

と問題とするし、そして最後に目的という四つの部分に分けて順を追って、この物語を考えてみましょう。

## 1. 場面 1-2節

結婚式の舞台裏、イエス様が行われたその場面について、1-2節に「:1それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、そこにイエスの母がいた。:2 イエスも、また弟子たちも、その婚礼に招かれた。」と描かれていました。さて容易に読み取れたかと思います。場面はガリラヤのカナで行われた結婚式でした。ピリポとナタナエルに出会った日から3日の後、イエス様は弟子たちと一緒に招かれた式へとやって来たのです。

### ◎背景

これからこの場面をひも解いていくのに、二つ大切な背景があるので、ぜひ頭の片隅に入れておいてください。

#### ・カナの町

まず一つ目に、ここで出てきたカナの町は、イエス様が育ったナザレの町から大体北に十数キロほど離れた場所にあった何の変哲もない町の一つでした。だれもが知っているような有名な繁栄した大都市ではありません。人口にしても、隣町のナザレには当時多くて500人ぐらい、このカナに至っては数十人ほどが暮らしているような非常に小さな町でした。ゆえに、ナザレの町とカナの町は近い関係にありました。この二つの町の住民たちは、恐らく互いが互いのことをよく知る間柄にあったわけです。結婚式を挙げた新郎新婦のことも、多くの人たちが知っていたことでしょう。そんな小さな目立たない場所にあつて、イエス様は最初のしるしをなされたのです。

#### ・当時の結婚式

覚えていてほしい二つ目の背景は、この当時の結婚式は、現在の結婚式よりもはるかに大きなお祝い事だということです。当時のユダヤ人の結婚式は、一日だけでは終わらず、約1週間も続くものでした。今の私たちからすれば信じられないかもしれません。学校や友人に、「すみません、友人の結婚式で7日間休みます」などと言ったら、確実に怒られるでしょう。でも、それがこの当時の文化だったのです。また、期間の違いに加えて、当時の結婚式では主に花婿やその家族がすべての準備や計画を担っていました。今では花嫁が中心になって、いろいろなことを考えるかもしれません。でもこの当時は、花婿やその家族がすべての働き、準備や計画を担っていたのです。当時の結婚式には、家族や親族、友人だけではなく、町全体の人たちが招待されました。そしてその全員が最後まで楽しむことができるように、十分な食事や飲み物の用意をしておくという責任を花婿は負っていたのです。盛大な結婚式にあつて、花婿に与えられていた責任は非常に大きなものでした。

## 2. 問題 3-5節

カナの町は小さな町で、お互いがお互いを知っているようなところだったこと、そして結婚式は非常に大きなもので、花婿に与えられた責任はすごく大きなものだったということ、この背景を覚えた上でこの場面を見てみましょう。そのような場面にあつて、大きな問題が発生したのです。3節に「ぶどう酒がなくなったとき、母がイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。」とありました。起こっていた深刻な問題は、ぶどう酒がなくなったということでした。予定していた人数よりも、はるかに多くの人たちが結婚式に来たのかもしれませんが。用意していた量がそもそも少なかったのかもしれませんが。なくなった理由自体は明らかにはされていませんけれども、お祝いの席にあつて、みんなが飲むぶどう酒が底をついてしまったと言うのです。

これを聞いて、今の私たちは思うかもしれません。全然大したことない問題ではないのでしょうか、なくなったのであれば、代わりの飲み物を出せばいいではないですか、すぐに買い足しに行けばいいではないですか。今の私たちは、そんなふうに軽く考えてしまうかもしれません。でも、当時の社会にあつ

て、これは大事件でした。どうしてかと言うと、まずぶどう酒というものは、そもそも結婚式などのお祝い事に欠かせないだけでなく、当時の人たちがふだんから口にしていた飲み物でもありました。古代社会におけるぶどう酒のあり様をウィリアム・バークレー先生もこんなふうに表現しています。「古代において、ぶどう酒は常に利用されていました。水の供給があまりにも不十分で、時には危険を伴う場合もあったため、ぶどう酒は最も自然な飲み物だったのです。」と。もちろん当時の人たちは今の私たちが持っているような浄水装置を持っていたわけではありません。水はさまざまなものによって汚染されて、そのまま飲もうとすれば、からだにいろいろな害を及ぼしてしまふことがありました。だからこそ人々は水とぶどう酒を3対2で割った飲み物をふだんから飲んでいたのでした。この当時の人々にとって、ぶどう酒というのは、最も身近にあったの飲み物でした。

では考えてみてください。もし私たちが結婚式に招かれて行って、お祝いの途中で、「すみません、これから数時間皆さんにお出しする飲み物は何もありません」と言われたら、どう思います？それは非常にまずい問題だったでしょう。でもそれ以上に、結婚式にあつて、ぶどう酒を欠くということ自体が大きな問題でした。大きな恥を、社会的な不名誉をもたらすものでもあったのです。先ほども触れましたが、当時の結婚式にあつて、ありとあらゆる準備をする責任を負っていたのは新郎でした。多くの知人や親戚だけではなく、町の人たちが集って来る結婚式において、きちんとすべてのことを計画して用意しておくということは、これからの生涯をともにする花嫁を支えていくことができるかどうかを証明する最初の機会だったのです。だとすれば、そこで最も不可欠なぶどう酒を切らせてしまったとするならば、それは大変大きな恥を新郎自身にもたらしたのです。新郎自身だけではなく、家族全体にもたらすものでした。その場だけで済む問題ではなかったのです。それを目にした同じ町に住んでいる多くの人たちからの信頼や評価を完全に損なってしまう、社会的な立場をこの先ずっと失う可能性もありました。それに加えて、ぶどう酒をなくしてしまうというのが余りにも不名誉をもたらすからこそ、実際に花嫁の家族は新郎のことを裁判にかけて訴えるようなケースもあったと言われています。ですから、ぶどう酒がなくなったということは、些細な出来事ではありませんでした。新郎新婦の将来の生活においても、またその結婚式すべてを台なしにしてしまうかもしれない、そんな大事件が起こっていたのです。

そしてそのような問題が生じた場所にいたのがイエス様の母マリヤでした。そしてその彼女は息子のところにやって来て、「ぶどう酒がありません」とその事情を伝えたのです。いったいどうしてマリヤは花婿やほかの人に伝えず、真っ先にイエス様のところにやって来たのでしょうか？私たちの知り得る限りですけれども、イエス様はこの時点まで一度として奇跡を行ったことはありませんでした。ここが最初のしるしだったのです。ですからマリヤは、イエス様が食べ物をふやしたり、病を癒したりするようなみわざを目の当たりにしてきたわけではありませんでした。彼女自身も実際に息子が力強い奇跡を行う姿を見たことはなかったのです。ではいったいなぜ彼女はイエス様に事情を伝えたのでしょうか。なぜ彼女は起こっていた大問題を息子に伝えたのでしょうか？その答えはもう明白でした。その“力”というものを自分の目で見ていなかったとしても、マリヤは息子がどんな存在なのかを少なからず知っていたのです。思い出してみてください。イエス様の誕生に際して、マリヤは御使いからルカ1：35で「**聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。**」、こう言われていました。イエス様は「**聖なる者、神の子と呼ばれ**」る者なのだと、マリヤはを聞かされていたのです。そしてそれに加えて、マリヤは赤ん坊の時からイエス様のことを育ててきたのです。少し考えてみてください。私たちとは違って神の御子であるイエス様は、子育ての過程で一回も罪を犯すことはありませんでした。生まれた時から一度として親に逆らうこともなければ、友人とけんかすることもない。いつも従順に親に従い、友達を愛していたような子だったのです。イエス様は知恵と知識にあふれていて、いろいろな問題や質問があれば、いつも完璧で間違いのない答えを与えてくれる子どもでした。すごいと思いませんか？幼い時からイエス様ほど頼りになる存在はいなかったのです。

ちなみに多くの聖書注解者たちは、今回の場面を含めて、イエス様の働きの中に父ヨセフの名前が一回も出てこないことから、この時にはもうすでに亡くなっていたのではないかと考えています。12歳の時に、父ヨセフが出てきましたけれども、それ以降はもう出てきません。でも、そうなのであれば、なおさら夫を失っていたマリヤにとって、いろいろな面において長男はごく自然に頼りになる存在でした。何か困りごとがあったとしても、真っ先に助けを求めてきたのです。そしてそんな間柄にあったからこそ、今回も真っ先にぶどう酒がありませんと言ったのです。

みことばをもう一度よく見てください。助けを求められたイエス様の応答は非常に不思議なものでした。4節にこのように続いています。「:4すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」」と。「女の方」という読み方を聞くと、ある人は無礼さを感じるかもしれません。自分の母親のことを「女の方」と呼んでいるような人は、恐らくだれもいないでしょう。でも覚えていてほしいのは、ここでイエス様が母親に対して失礼な、また傷つけるような発言をしようとしていたのでは決してなかったということです。「女の方」というこのことばのうちにも、イエス様の優しさや愛情は含まれていました。その証拠に、イエス様は十字架の上でも同じことばを口にしておられました。同じヨハネの福音書19:26にこんなふうに書いています。十字架につけられたイエス様は「イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます」と言われた。」と。イエス様は確かに最後の最後まで母親のことを気にかけていた人物でした。

ただ、それと同時に、地上での働きを始めたイエス様と家族との結びつきは変化していきました。ご自分が来た目的を果たすために、イエス様は地上で持っていた親しい関係との間にみずから距離を取るようになられました。どういうことかということ、たとえばイエス様と群衆とのやりとりが福音書の中にこんなふうに記されてきました。マタイ12:46-50に「:46 イエスがまだ群衆に話しておられるときに、イエスの母と兄弟たちが、イエスに何か話そうとして、外に立っていた。:47すると、だれかが言った。「ご覧なさい。あなたのお母さんと兄弟たちが、あなたに話そうとして外に立っています。」:48しかし、イエスはそう言っている人に答えて言われた。「わたしの母とはだれですか。また、わたしの兄弟たちとはだれですか。」:49それから、イエスは手を弟子たちのほうに差し伸べて言われた。「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。:50天におられるわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」と記されています。私たちが普通にこの箇所を読んでいくと、自分の母親や自分の兄弟に向かって「だれですか」などと言うのはひどいではないですかと思ったりします。いろいろな箇所で見ても同じようなことを見て取ることができます。でも、私たちが覚えておかなければいけないことは、イエス様は別に冷たい意地悪な心でこのようなことを口にしていただけでは決してないということです。自分の家族のことは変わらずに愛し続けていました。ただ、イエス様はご自分の役割を、ご自分の立場というものを明らかにしておられたのです。

救い主として来られたお方は、肉の関係に縛られるお方ではありませんでした。生まれ持った母親、兄弟との関係というのがイエス様の考えや思いを左右するのでも、イエス様の行動を決めるのでもありませんでした。そうではなく、イエス様はただ父なる神様のみこころに従うことに焦点を置いて歩もうとされていたのです。例外はいみませんでした。母マリヤにとっても、イエス様はそのような存在でした。母マリヤにとってイエス様は確かにどんな時も息子でした。でも、それと同時に、彼女にとってもイエス様は約束の救世主であり、神の子だったのです。イエス様が地上に来られたのは、究極的に母の願いをかなえることでも、母の考えに沿うことでも、母のみこころをかなえることでもありませんでした。イエス様は父なる神様のみこころを、みこころの時に果たすために、言いかえれば来たるべき時、罪人のために十字架にかかって死ぬ、そのために地上に来られたのです。家族のことをイエス様は変わらずに愛していました。でも、息子としてではなく、救い主として、神の御子として家族と接し、その時もイエス様は父なる神様のみこころのことを必ず優先されていたのです。そのことをマリヤも学ばなければなりません。

でした。息子ではなくて、救い主イエス様として、そのなされることに、マリヤもすべてをゆだねる必要があったのです。

この点に関して、注解者D・A・カーソンもこんなことばを残しています。「イエスの唯一の指針は、天の父の御心でした。……マリヤは彼を産み、育て、赤ん坊の指に基本的な動きを教え、歩き方を覚える時に転ぶのも見守ってきました。さらには、家族の養い手として頼るようになっていたようです。しかし、イエスが地上に来られた目的を果たすために歩み始めた今、全てのこと、たとえ家族の絆であっても、その神の使命に従属しなければなりません。マリヤは他の母親が自分の息子を見るようには、もはや彼を見ることはできなかったのです。」と。母親であるマリヤにとって、この事実は受け入れるのに難しいものだったでしょう。でも彼女はこんな行動を即座にとっていました。ヨハネの福音書に戻ってみると、イエス様の応答を耳にしたマリヤは5節のところでこう言っていました。「母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」」と。マリヤは自分の思いを貫き通そうとするものではありませんでした。マリヤは身を引いて、進んでイエス様に服従したのです。理解できないことも混乱もうちにあったでしょう。にもかかわらずイエス様のなされるそのことをただ信頼したのです。これがマリヤが持っていた信仰でした。私たちもいろいろなことを考えさせられるものになるのです。マリヤはどんな時も最善を果たされるその方の御手にすべてをゆだねていたのです。

### 3. しるし 6-10節

これは私たちにとっても、マリヤにとっても最も知恵ある最高の選択でした。なぜなら、イエス様はついに動かれることになるからです。浮上した問題を解決するそのために、主はだれにもできない、驚くべき奇跡をなされていました。場面、問題と考えてきましたけれども、次にしるしについて見てみましょう。6節に「さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった」と続いています。この情景を思い浮かべてみてください。結婚式には6つの大きな石の水がめが用意されていました。何のためかという、単に風邪を予防するためではなく、「ユダヤ人のきよめのしきたりによって」、結婚式にやって来たすべての人たちは、そのうたげに参加する前に少なくとも手と足を洗う必要があったのです。この当時、汚れたままではうたげに参加すること、また食事をするのも絶対に許されませんでした。汚れたままで食事に加わることは許されないことだったのです。だからこそ手を洗わないイエス様の弟子たちを見たパリサイ人たちはいつも怒っていました。マルコ7：3-5にもその時の様子が描かれています。「:3 — パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わないでは食事をせず、:4 また、市場から帰ったときには、からだをきよめてからでないと食事をしない。まだこのほかにも、杯、水差し、銅器を洗うことなど、堅く守るように伝えられた、しきたりがたくさんある—:5 パリサイ人と律法学者たちは、イエスに尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えに従って歩まないで、汚れた手でパンを食べるのですか。」」と。いずれにしるし結婚式にやって来た人たちは、ひとり残らず全員確実に手を洗うことができるように、それだけの水が入った水がめが用意されていたのです。80リットル、120リットル、それぐらい入る大きな水がめが六つも用意されていました。お祝いの場に多くの人たちが集って来ていたのが、これだけでもわかります。

そんな結婚式の裏側であって、7節「イエスは彼らに言われた。「水がめに水を満たしなさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。」とあります。著者ヨハネはここで「縁までいっぱいにした」と意図的に詳細を描いていました。水がめに注がれたその水は、今にもあふれ返りそうになるほど縁いっぱいになっていたと言われているのです。なぜヨハネはこんな細かい部分まで触れていたのでしょうか？それは、イエス様のなされるしるしというものが、だれの目にも疑いのない圧倒的な力によるものであることを明らかにするためでした。もし、少しでも隙間があったとしたら、疑り深い人たちは疑問を呈して言ったでしょう。イエス様はその隙間に、水のほかに最後に何かを混ぜていたに違いない、もしくはその隙間に後

で買ってきたぶどう酒を加えて混ぜたに違いないと。いろいろなことを言われる可能性がありました。でもここではそのようなことを言うことは不可能だったのです。水がめはもうすでに縁までいっぱいになっていて、これ以上何かをつけ足すことはできませんでした。水がめの中は100%水で満たされていたのです。

そして、その後どうなったかという、8-9節に「:8 イエスは彼らに言われた。「さあ、今くみなさい。そして宴会の世話役のところに行って行きなさい。」彼らは持って行った。:9 宴会の世話役はぶどう酒になったその水を味わってみた。それがどこから来たのか、知らなかったのに、——しかし、水をくんだ手伝いの者たちは知っていた」と記されていました。。いったいどのタイミングで水がぶどう酒に変わったのか、私たちにはよくわかりません。水がめからくんだ瞬間だったのかもしれませんが、世話役のところに行く間に変わったのかもしれませんが。飲む直前に変わったのかもしれませんが。この時、この瞬間に変わったという具体的なタイミングは私たちにはわからないのです。でもはっきりとわかっていることは、水がぶどう酒に変わっていたということでした。当たり前と思うかもしれませんが、水をそのまま放置していたとしても、ぶどう酒に変わることはありません。私たちがきょう家に帰って、コップに水を入れて数時間、1週間ずっとほっておいたら、水が全く別の飲み物に変わる、ぶどう酒に変わるということは絶対にあり得ないのです。そして、それこそがポイントでした。水がぶどう酒に変わっていたという事実は、神様であるイエス様だけがなし得ることのできるみわざだったのです。世界を創造したその偉大な力を持つ主だけが水を全く違うぶどう酒に変えることができたのです。

しかもこのぶどう酒はただのぶどう酒ではありませんでした。これまで作られてきたどんなぶどう酒にも勝る最高のものだったのです。ぶどう酒を味見した宴会の世話役が花婿を呼んでこう言っていました。10節「「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、人々が十分飲んだころになると、悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒をよくも今まで取っておきました。」と。おもしろいと思いませんか？舞台裏で、結婚式全体を揺るがす大問題が生じて、またその窮地を救うすばらしい奇跡をなされたにもかかわらず、最後に焦点が当たっていたのはイエス様ではありませんでした。すごいみわざをなしたイエス様は、結婚式の表舞台に出て来て、「新郎、わたしが、あなたが恥をかくのを救いました」、「世話役の方、わたしが最高のぶどう酒を作った張本人です」などと言い張ることはありませんでした。イエス様が行った水をぶどう酒に変えるというこのすばらしい最初のしるしは、すべて舞台裏で行われていたことでした。それが神の子としてこの地上に来られたお方が最初になしたしるしでした。舞台裏にはすばらしいことがなされていたわけです。

#### 4. 目的 11節

でもこれは、このしるしが何の影響をもたらす者のない些細なものであったというわけではありません。ここには大きな目的が秘められていました。そしてそれが、私たちが最後に見たいことです。改めてみことばに戻っていただいて、イエス様のなしたそのしるしの目的が11節に明らかにされていました。11節に「イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。」と書いています。ご存じの方もいると思いますが、新約聖書を見ていく時、いわゆる“奇跡”と私たちが呼ぶものに関して、実は幾つかのことばが使われています。最も一般的に使われるものは、「力強い偉大なみわざ」という意味を持っている“デュナミス”ということばが挙げられますが、不思議なことに、そのことばはヨハネの福音書の中には一度も出てきません。その代わりに、ヨハネが用いていたのが「しるし」という意味を持つ“セーメイア”ということばでした。ヨハネはあえて「しるし」ということばを使っていたのです。そしてこれはこの福音書全体の大切なメッセージを私たちに教えてくれていました。それは、イエス様の“奇跡”というのは、単なる力の誇示でもなければ、大衆を引きつける、感動させるためだけのパフォーマンスではなかったということです。

イエス様の“奇跡”というのは、奇跡自体にではなくて、その奇跡を行った人物に、もっと言えばイエス様がどのようなお方なのか、その正体を明らかにするものだったと言うのです。「しるし」——奇跡というのは、奇跡で終わるものではありませんでした。「力強いしるし」というのは、すべてその力強いみわざをなすことのできたその存在に、人々の目を向けるものだったのです。それを踏まえて、改めて考えてみてください。カナの婚礼で起きた出来事は、イエス様がなした最初のしるしでした。水をぶどう酒に変えたということは、確かに驚くべき力強いみわざでした。でもそこに焦点があったわけではありません。イエス様はそのしるし、そのみわざを通して、イエス様ご自身の姿を、ご自身の神としての栄光を弟子たちや母親の前で現されていたのです。カナの婚礼の場面を覚えた時に、私たちはどんなイエス様の姿を見て取ることができるでしょう。いろいろな姿を見て取ることができますが、たとえば私たちはこの中に、イエス様というのが力強い創造主なのだということを見て取ることができるのです。神様がほかのだれの助けも必要とせず、この世界のいっさいをご自分の手で造られたように、主もだれかほかの人の助けを必要とせず、ただご自身の圧倒的な力によって水をぶどう酒に変えられていました。イエス様は力強い創造主だったのです。でもそれだけではありません。イエス様はあわれみ深い主でもありました。このカナの婚礼の話を読んで、「ぶどう酒がなくなりました」という知らせを聞いた時、イエス様は別に自分には関係ありません、ちゃんと用意しておかない方が悪いでしょうと、その場を立ち去ることもできました。でも、イエス様はあわれみの心を示し、力を示すことによって、新郎新婦が大きな恥をかかないようにと必要を備え、結婚式全体をも救われていたのです。

イエス様の弟子たちは、イエス様の姿を目の当たりにしました。彼らは以前から約束の救世主についていろいろなことを聞いてはいたでしょう。その偉大さや力強さというものを知識としては知ってはいたでしょう。でも、この場において彼らは父のみもとから来られた神のひとり子の栄光というものを初めて自分の目で見たのです。そしてその結果、それが明らかにされた者たちの応答は、11節の最後に「弟子たちはイエスを信じ」ましたとありました。救い主に会って従い続けていた彼らのその信仰というものは、自分のこととしてイエス様の姿を知ったことによってさらに強められたのです。奇跡自体ではありません。奇跡を通してイエス様をご自身を明らかにされた時に、それを信じた人々の信仰はさらに強められていました。これがしるしの、主のみわざの目的だったのです。人々はさまざまなしるしを通して、イエス・キリストが神の御子であることを、まことの救い主であることを知りました。考えてみてください。イエス様は、その生涯において水をぶどう酒に変えただけではありません。これはただの始まりに過ぎませんでした。イエス様はこれから先、役人の息子の病を癒し、5,000人の男たちを養い、目の見えない者のことを見えるように、ラザロを死からよみがえらせ、そして何よりご自身十字架にかけて苦しみ死なれ、3日目に死に勝利してよみがえられました。そのすべてを通して、この方はご自分の持つ神様としての圧倒的な力というものを、ひとり子としての輝かしい栄光というものを明らかにされ続けていたのです。

だからこそ私たちがキリストのなされた偉大なみわざを見る時に、それはただの物語の一つではありません。カナの婚礼というのも、教会学校で習う有名なお話でもありません。それらのしるしは、私たちにイエス様がいったいどのようなお方なのかということをお教え、そしてその力強いみわざをなしたお方にますます信頼して生きる、そんなへりくだった心を私たちのうちに生み出してくれるものになるのです。ですから、奇跡はただ奇跡で終わるものではありません。それらは私たちにイエス様がどれほど力強い創造主なのか、どれほどあわれみ深いお方で、どれほど恵み深いお方で、どれほど忍耐深く、どれほどへりくだったお方なのかを、神の御子として来られた救い主がどれほど栄光に満ちたお方なのかということをお明らかにしてくれるものだと言うのです。

このカナの結婚式の舞台裏で覚えることは、イエス様がすごい奇跡をなさったことだけではありません。私たちに問われるのは、果たして私たちは本当にイエス様の姿を正しく覚えて、信頼して歩んでいる

でしょうかということです。私たちの愛する主に、ふさわしい愛を示し、ふさわしい賛美をささげ、どんな時もその偉大さを礼拝する者として歩んでいますかということです。結婚式の舞台裏は、イエス様のすばらしさを教えてくれました。もし私たちの目が別のものに向いているのであれば、思い出し続けることです。小さなカナの町での結婚式、その舞台裏にあつて、圧倒的な力を示されたお方がいました。神様にしかできない創造の力を明らかにし、人々にあわれみを、愛を示された偉大な救い主、イエス様に心を留め続けて生きて行くことです。舞台裏はすごいことを私たちに教えてくれました。焦点は、奇跡そのものではありません。奇跡を成し遂げられたイエス様です。その偉大なイエス様を心から信じる者として、心から礼拝する者としてこの一週間も、ともに歩んでいきましょう。